

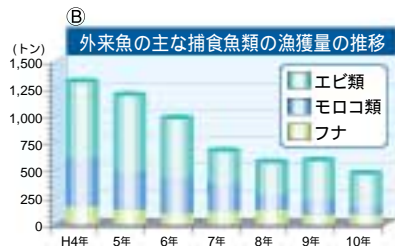
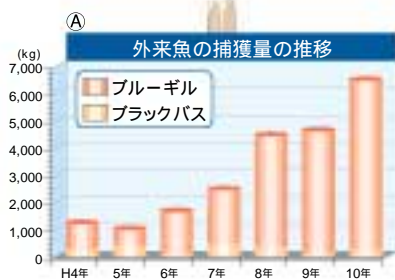


## 【琵琶湖の生態系をまもる】

琵琶湖は、起源を600万年前までさかのぼることのできる世界でも数少ない古代湖のひとつです。この長い歴史のなかで50種を超える固有種をはじめとする豊かな生態系が育まれてきました。滋賀県では、かけがえのない生態系をまもり、水産資源を保護するために昭和40年に独自の漁業調整規則を公布。



外来魚 / ブルーギル



そこには、ビワマス、フナ、ホンモロコ等、指定された16の水産動物以外の種類を知事の許可なく移植してはいけません。厳しく定められています。

しかし、近年の琵琶湖をめぐる環境の変化のなかでも、本来、棲息しないはずのブラックバスやブルーギルに代表される外来魚の繁殖が深刻な問題となっています。とくに、ここ数年のブルーギルの急増に反比例するように外来魚のエサとなるフナやモロコ、エビ類の漁獲量が大幅に減少。現在、南湖周辺で網にかかる魚のうち約9割が外来魚といわれ、いま琵琶湖の生態系が大きく崩れようとしています。このような状況を受けて、滋賀県の補助を得て県漁業協同組合連合会では外来魚駆除作戦緊急対策事業として、漁業者が捕獲した外来魚を買い上げるなどの新たな方策をスタートしました。また、日本釣振興会滋賀県支部では釣り人に向けて、釣上げた魚を持ち帰って食べる“キャッチ・アンド・イート”を提唱し、外来魚の再放流を防ぐ啓発活動を展開。まさに、琵琶湖の生態系をまもるために官民一体となったさまざまな取り組みが行われています。



取材協力 / 滋賀県農政水産部  
資料 A / 大津漁業協同組合調べ 資料 B / 滋賀農林水産統計年報